

# JRAにおける外厩制度の可能性

## Stay inside or gallop to outside? A study of JRA's stable system

1K10C482 渡邊 裕喜

主査 武藤泰明 先生

副査 作野誠一 先生

### 【目的】

内厩制度が長年にわたって JRA の公正確保に与えた功績は大きい。しかし、近年の様子を見ると、そのマンネリ化した同血統の出走馬、同厩舎どうしのレースを観て果たしてファンは本当に心から感動できるか疑問に感じる。そのいい例が 2011 年の日本ダービーである。18 頭すべてが、かの大種牡馬サンデーサイレンス産駒だったのである。もはや競馬から”ストーリー”はなくなってきたとさえ感じる。

本研究では内厩制度が抱える課題を明らかにしていくなかで、外厩制度移行への可能性を追究していく。

そして、外厩制度がもたらす「真の競争を生む土壌」と「競馬のスポーツ性の確立」によって、厩舎ベンチャーなるものが台頭するモデルの模索を行う。

### 【方法】

第 2 章で JRA という組織についての概要と業績の現状把握、日本の余暇市場規模の確認、それらから導き出される取り組むべき課題への提言を行う。

第 3 章は内厩制度について、ファンのアンケート結果や現行の厩舎の概要に関する説明を行いながら、近年のレースの勝利厩舎、勝利馬主からその体制の問題点を明らかにする。また、内厩制度をとるうえでのメリット・デメリットを見ていく過程で内厩制が孕む諸問題と弊害、そして外厩制移行への正当性を確認する。

第 4 章は外厩制度の可能性について論じるにあたり、まずは地方競馬の認定厩舎制度導入の歴史と、岡田繁幸氏の外厩制への挑戦の軌跡を追う。そして、認定厩舎制度第 1 号であるホッカイドウ競馬所属のコスモバルクにスポットを当て、中央での活躍とその意義を見出す。

第 5 章では認定厩舎制度を使って中央のレースに出走するコスモバルクの運用面の難しさから、現在の JRA 規則の課題を把握する。また、コスモバルクの 2004 年皐月賞での好成績を民間施設使用による調教によるものであるとの見解を提示し、外厩制導入における成功例と位置づけ、コスモバルクの認定厩舎制度第 1 号としての功績を振り返るものとする。

第 6 章は本研究で得られた JRA が抱える厩舎問題についての課題を理解したうえで、今後の日本の中央競馬発展に対する提言を行う。

### 【結果】

内厩制をとることによって様々な弊害が生じており、それが JRA の人気低迷につながっていると分析した。

まず、JRA の管理下におかれたトレセンや馬房には預託制限があり、新規経営の調教師には門戸が狭い。一方、既存の有力厩舎は一度交付された免許で手厚く保護され、縁の深い馬主との預託契約によって生活に窮することは少ない。よって、厩舎どうしの競争性が失われ、勝利馬には偏った血統・厩舎・馬主が集中し、ファンを十分に魅了するレースが出来ていない。

次に、調教師免許取り消し事件に伴う JRA の公正確保に対する管理体制の甘さであり、自然淘汰の働かないシステムへの限界という問題がそこには存在した。

それに対し、ホッカイドウ競馬で初めて導入された外厩制度である「認定厩舎制度」は、岡田氏所有のコスモバルクの活躍によってその有効性が認められるものであった。良質な血統馬の産駒だけが活躍するという従来の図式は覆され、安価で平凡な馬でも主催者の制約の少ない施設で調教することにより、重賞レースでも対等に渡り合えることを実証した。これは、競争性を失った競馬界に新たな厩舎出現の可能性を提示するものである。

さらに、サンデーサイレンスのような良質産駒が蔓延している現状の中で、「地方の星」などの話題性で競馬界に“ストーリー”を紡ぎ出す役割を担った。

### 【考察】

なぜ JRA の売上が低迷したのか。その答えを求め、本研究を進めていったが、原因は皮肉にも公正で安全な競馬を追求したことによる結果ではないかと感じた。主催者である JRA は過去の過ちから公正確保の念に駆られ、それが及ぼす諸問題に目を覆い、結果的に競馬からストーリー性を奪い去り、多くの競馬ファンを失望させた。

また、現行の制度では地方所属馬の中央への優先出走権の問題や、外厩ゆえの厩舎運営の難しさ、競走馬への負担に関しては課題も残されており、JRA の規則改訂など、今後の動きに注目していく必要がある。

しかし、認定厩舎制度によるコスモバルクの活躍は、競馬界に新鮮な風を呼び込み、その期待に陣営は見事に応えた。外厩制度が中央競馬において適用される日も遠くはないかもしれない。